

シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(5)

鳴島 史之

(平成5年9月30日受理)

A Study on Shakespeare's Eye Imagery (5)

Fumiyuki NARUSHIMA

Abstract

In this paper, I will deal with Sir Philip Sidney's *Astrophil and Stella*, and compare this sequence of sonnets with that of Shakespeare's. I will point out that one of the differences between these two collections of sonnets consists of the appearance and disappearance of Cupid, the God of Love. I will try to show how much importance the imagery of Cupid has for Sidney's poetry, because Cupid is one of the images deriving from Italian sonnets, especially Petrarch's. I have traced the origin of English sonnet sequences from Petrarch in a previous paper, and I'd like to place Sidney's sonnets definitely in that stream.

The imagery of eyes is another important topic of my paper, and I will show some evidence of how that imagery is associated with Cupid in Sidney's sonnets. I will also try to solve the mystery of why Shakespeare did not use the imagery of Cupid in his sonnets.

In passing, I will briefly indicate that there is a break in the theme of Cupid after sonnet 86 in *Astrophil and Stella*, which can be explained as being the point at which there was a break in the writing of the sonnet sequence itself.

第二章 他のソネット作家たち

第二節 サー・フィリップ・シドニーの *Astrophil and Stella*

2.2.0. ここではシェイクスピアの *Sonnets* に先行して存在し、影響を与えたと思われる Sir Philip Sidney のソネット集 *Astrophil and Stella* の分析を試みる。*Astrophil and Stella* における連想のつながりのひとつに、Petrarch 以来の Sonnet Sequences の流れを汲む、〈目〉—Cupid—矢—〈死〉という形がある。ここで、〈死〉は、恋のために嘆き、その結果死ぬという文脈にあることが多く、ソネット集全体が Cupid に支配された恋の世界を舞台にしていると言える。この中で上記のイメージ群の連関を調べていく。

第一項「目」と Cupid

2.2.1. まず、〈目〉と Cupid のつながりであるが、Cupid あるいは擬人化されたイタリックの *Love*

への言及が eye という語と同一のソネットの中にしばしば存在し、そのとき Cupid と eye は非常に接近していることが観察される。

ここで注意すべきことは、Cupid 自身が盲目であり、その矢で人をでたらめに盲目の恋に導くというエリザベス朝にはよく知られた連想の形(つまり blind のイメージを経由した連想)ではなく、Cupid=恋そのものとして Stella の瞳に輝いているというとらえ方をされていることである。

Cupid の歴史から考えても、盲目の Cupid が出てくるエリザベス朝はずっとあとの時代で、古典の中では(ギリシア、ローマそしておそらく大陸ルネッサンスのごく古い時代には)Cupid は盲目の恋を司る役目はあっても、自ら盲目ではなかった。このことに関しては、Erwin Panofsky はつぎのように言及している。

The little winged boy armed with bow and arrow was a very familiar figure in Hellenistic and Roman art. Only this figure was very rarely blind in classical literature, and it was never blind in classical art.¹⁾

射手が盲目であればその矢は必ず的外れになるわけで、あまり恐れるに足りない相手であっただろう。Sidney においても、便宜的に慣習を踏襲して、“... being blind/By Nature borne, I gave to thee mine eyes.”(65.7-8)²⁾ とあるように、Cupid は盲目として描かれる。だが、この射手の手腕はかなりなもので、Sidney にはその矢がよく命中することは確かだ。

それではどういうふうに Cupid が描かれるかという点、Cupid 自身が Stella に恋して、次第にその護衛になって近づくものを容赦なく射つという形式がその一つである。以下では〈目〉と Cupid が共存するソネットを中心に見て行きたいと思う。

さて、*Astrophil* の中で、eyes は第5番のソネットに初出し、Cupid との強い関連が見られる。ここでの目は Stella の目が想定されているようで、Cupid's dart に擬せられている。

It is most true, that eyes are form'd to serve
The inward light: and that the heavenly part
Ought to be king, from whose rules who do swerve,
Rebels to Nature, strive for their owne smart.

It is most true, what we call Cupid's dart,
An image is, which for our selves we carve;
And, fooles, adore in temple of our hart,
Till that good God make Church and Churchman starve.

(1-8)

第一スタンザと第二スタンザは、イメージ的にそれほど遊離しているわけではない。ここでの“inward light”とは、「理性」と言い替えることもできるだろう。〈目〉を通じて「美」や「愛」が侵入するわけで、その際、「内なる光」によって検閲を受ける様を表していると思われる。

この部分の記述は非常にプラトンのように、要するに「美」や「愛」を計る基準は外部的に存在するのでなく、人間の内面(のアイデア)に指針を定めるべきだとする姿勢に貫かれている。

あたかも、神の息吹によってアダムの息が吹き込まれたかのように、「美」や「愛」は Cupid の矢の形で〈目〉から侵入し、*Astrophil* の精神に影響する。Cupid の矢のイメージとしての重要性

はそのあたりにあるのだろう。

Love という擬人化された Cupid は第8番のソネットでも矢を持ってあらわれ(1-3), *Stella* の顔に留まる。“Whose faire skin, beamy eyes, like morning sun on snow, / Deceiv'd the quaking boy” (9-10).

9番には *eyes* は出てこないが, “The windowes” (9) すなわち *Stella* の目が “touch” (12) という黒い宝石になぞらえられ, それは “*Cupid's self*” (13) が美の鉱山から掘ってきたことになっている。

さかのぼって7番のソネットでも *Stella* の瞳の黒さが話題になり, その黒さは Cupid の喪服になぞらえられる。

... she minding *Love* should be

Placed ever there, gave him this mourning weed,

To honor all their deaths, who for her bleed.

(12-14)

この詩では *Stella* の目が出てくるのは1行目で, Cupid が出てくる終行近くとは位置的に離れているが, 題材としては, *Stella* の目が話題の焦点であるため, 距離はさほど関係ないと思われる。

11番では “*Love*” (1) が, 子供がきれいな絵本を愛でるように, 「ステラの瞳孔」 “babies in her eyes” (10) を見るとある。

12番のソネットでも Cupid は *Stella* の〈目〉の中にいる。“*CUPID*, because thou shin'st in *Stella's eyes*” (1).

13番には *eyes* という語は出てこないのだが, 不思議なことに Cupid を述べる一行は, “*Cupid* then smiles, for on his crest there lies” (9) とある。何が不思議かということ, 前二つのソネットで *eyes* と顔を踏んでいるのは *lies* なのである。偶然とも思われる事柄だが, 他ならぬ *eyes* との関連であるから, これを指摘しておく。³⁾この三つのソネットにおいて, *eyes* (13番では *lies*) の近くには *Stella* という語がある。

16番の “*eyes*” (10) の周囲には Cupid はいないのだが, やはり詩人の目は *Stella* を見ていて, “In her sight I a lesson new have speld, / I now have learn'd *Love* right” (12-13) とあるように *Stella* が〈愛〉の源泉になっていることは変わりがない。

このように Cupid と *Stella* の〈目〉は密接に結び付き合い, 17番に至ると Cupid の弓矢そのものが, *Stella* の目を材料に作られたのだと言及される。このソネットの中で, Cupid が矢の力で Mars の愛をつなぎとめることをしなかったとして, 母 Venus の怒りを買ひ, その弓矢を折られてしまう。Cupid が泣いていると, 祖母 Nature が通りかかり, *Stella* の〈目〉から弓矢をこしらえてくれるというのだ。

HIS mother deare *Cupid* offended late,

Because that *Mars*, growne slacker in her love,

With pricking shot he did not throughly move,

To keep the pace of their first loving state.

The boy refusde for feare of *Marse's* hate,

Who threatned stripes, if he his wrath did prove:

But she in chafe him from her lap did shove,

Brake bow, brake shafts, while *Cupid* weeping sate :

Till that his grandame *Nature* pittying it,
Of *Stella's* brows made him two better bowes,
And in her eyes of arrowes infinit.

O how for joy he leapes, o how he crowes,

And straight therewith, like wags new got to play,
Fals to shrewd turnes, and I was in his way.

20番に関しては次の項で詳述する。ここでは Cupid が Stella の目の中に武器を持って潜んでい
ることだけ指摘する。

As that sweet blacke which vailes the heav'nly eye :
There himsefe with his shot he close doth lay.

(7-8)

23番においても目は Stella の目である。“But only *Stella's eyes* and *Stella's hart*.” (14)

25番では, “. . . Vertue, if it once met with our eyes,/Strange flames of *Love* it in our
soules would raise” (3-4) とある。イタリックの *Love* がすなわち Cupid であるという即断はでき
ず, ここでもこれは Cupid を表わしているとは言えないが, 内容はプラトンとソクラテスの対話
に根ざしたもので, 5番のソネットと同工異曲であろう。このソネットにあらわれるもう一つの
“eyes” (11) は “*Stella's*” (10) と非常に接近していることを指摘しておく。

29番は戦争の比喩のソネットであり, “*Love*” (5) はすっかり “*Stella's heart*” (5) を占領し, *Stella*
の “eyes” (9) も, 将軍 *Love* に “shot” (10) を提供して命乞いをする。このあたりの言及はかなり凌
辱をほのめかすものになっている。

So *Stella's* heart, finding what power *Love* brings,

To keep it selfe in life and liberty,

Doth willing graunt, that in the frontiers he

Use all to helpe his other conquerings :

And thus her heart escapes, but thus her eyes

Serve him with shot, her lips his heralds arre :

Her breasts his tents, legs his triumphall carre :

Her flesh his food, her skin his armour brave,

And I, but for because my prospect lies

Upon that coast, am giv'n up for a slave.

(5-14)

Stella の瞳が武器になるというイメージは17番に通じるものである。

31番では, 月の世界でも Cupid がいたずらをしていると述べ, 月に向かって, 次のように同情
を寄せる。

What, may it be that even in heav'nly place
That busie archer his sharpe arrowes tries ?
Sure, if that long with *Love* acquainted eyes
Can judge of *Love*, thou feel'st a Lover's case . . .
(3-6)

32番には直接 Cupid は出てこないが、“blind eyes”(8)と述べられるとき、何らかの Cupid のイメージの働きが見られる。

36番も戦争の比喩として面白く、“*Love* thy Lieutenant lies”(5)と描かれる。この lies は“eyes”(3)と韻を踏んでいる。29番と発想は似ている。因みに、29番でも lies と eyes は韻を踏んでいた。

38番では、夜、眠りが訪れ、詩人の目を閉じようとするとき、“*To hatch mine eyes*”(2), *Love* 自らの手になる Stella の絵姿が心に浮かぶという。

Unto my mind, is *Stella's* image, wrought
By *Love's* owne selfe, but with so curious drought,
That she, me thinks, not onely shines but sings.
(6-8)

41番に eyes が現われるが、これは synecdoche で、“the English eyes”(3)は「イギリス貴族たち」の意味なので分析の対象に含めない方がいいだろう。

42番において、〈目〉は *Love* に征服され、*Love* を征服する。

O EYES, which do the Spheares of beautie move,
Whose beames be joyes, whose joyes all vertues be,
Who while they make *Love* conquer, conquer *Love*,
The schooles where *Venus* hath learn'd Chastitie.
(1-4)

さらに11行で“o eyes, dart downe your rayes”とあり、dart という語から Cupid の存在を予感させるのだが、ここは直接には矢の意味はないだろう。しかし、17番や29番で武器としての Stella の目の使用を経験したわれわれ読者にとって、どうしても弓矢のようなイメージはぬぐい去れないのである。

43番では、詩人は Cupid の助けを借りて、Stella に祈る。“FAIRE eyes, sweet lips, deare heart, that foolish I/ Could hope by *Cupid's* helpe on you to pray”(1-2)。

44番には Cupid は現れないが、eye と lie が韻を踏むことだけ指摘しておく。

Unkind, I love you not : O me, that eye
Doth make my heart give to my tongue the lie.
(13-14)

48番で、*Love* は Stella の目の中で貞淑である。

SOULE'S joy, bend not those morning starres from me,
 Where Vertue is made strong by Beautie's might,
 Where *Love* is chastnesse, Paine doth learne delight . . .
 (1-3)

49番も“*Love*”(1)と“faire to the eye”(8)が共存するが、この eye も synecdoche 的で、例えば、“it seeme[s] faire to me.”とこの部分を言い替えてもなんら問題なく思え、これは対象から外した。

50番では詩人は *Love* の命令で Stella の姿を描くが、あまりうまくいかない。
 And yet as soone as they so formed be,
 According to my Lord *Love*'s owne behest :
 With sad eyes I their weake proportion see,
 To portrait that which in this world is best.
 (5-8)

52番では Stella の目は *Love* のものだと言られる。“Her eyes, her lips, her all, saith *Love* do this”(3)。

53番では馬上試合で、Stella を見た瞬間から見とれてしまって、試合を放棄してしまう。ここで Stella を見ろと命じるのが Cupid である。

When *Cupid*, having me his slave descride
 In *Marse*'s liverie, prauncing in the press :
 ‘What now sir fool,’ said he, ‘I would no lesse,
 Looke here, I say.’ I look’d, and *Stella* spide,
 Who hard by made a window send forth light.
 My heart then quak’d, then dazled were mine eyes,
 One hand forgott to rule, th’other to fight.
 (5-11)

61番も“*Stella*'s eyes”(3)と“Doctor *Cupid*”(12)があるがこの eyes も synecdoche で、“I *Stella*'s eyes assayll”は“I *Stella* assayll”と意味的には同じことではないだろうか。eyes の持っている象徴性が薄いとみて、対象から外した。

62番でも *Love* は Stella の目の中にいる。“She in whose eyes *Love*, though unfelt, doth shine”(3)。

64番では、“eye”(5)と *Love* が出る行が韻を踏んでいる。

Let clouds bedimme my face, breake in mine eye,
 Let me no steps but of lost labour trace,
 Let all the earth with scorne recount my case,

But do not will me from my Love to flie.
(5-8)

同様なことがその前の63番にも言えるだろう。

O GRAMMER rules, o now your vertues show ;

So children still reade you with awfull eyes,

As my young Dove may in your precepts wise

Her graunt to me, by her owne vertue know.

For late with heart most high, with eyes most low,

I crav'd the thing which ever she denies :

She lightning Love, displaying Venus' skies,

Least once should not be heard, twice said, No, No.

(1-8)

ここでは“eyes”(2)と韻を踏むのは、実際には“wise”(3)であり、“denies”(6)であり、“skies”(7)であるのだが、その中間に“eyes”(5)が挟まっていることといい、7目行に *Love* が現れることといい、eyes-Love の印象をそのまま引きずっていることは否めない。筆者は押韻という現象を、多分に意識下の出来事として捉え、eyes にまつわる様々な語彙が *Love* という語とも関わりつつ、詩人の頭の中をぐるぐる回っている状態を想定したいのだが、そういった内容に関しては拙稿『シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(3)』、特に1.3.に詳しい。

詩にあらわれるのは *Cupid* のイメージとは言い難いが、文法書をながめているのは子供である。この詩では、対象となる目は詩人のへりくだった目であるが、見上げると *Stella* からは *Love* が輝いている。

65番では詩人は *Cupid* に目をあげることになる。

For when, nak'd boy, thou couldst no harbour find

In this old world, growne now so too too wise :

I lodg'd thee in my heart, and being blind

By nature borne, I gave thee mine eyes.

(5-8)

66番、67番と語られるのは *Stella* の目である。“*Stella's eyes*”(66.11)、“*Doth Stella now begin with piteous eye*”(67.2)。

70番では *Love* の目が話題になる。

Griefe but *Love's* winter liverie is, the Boy

Hath cheekes to smile, as well as eyes to weepe.

(7-8)

72番でも Cupid と eyes は接近する。

Vertue's gold now must head my Cupid's dart.

Service and Honor, wonder with delight,

Feare to offend, will worthie to appeare,

Care shining in mine eyes, faith in my sprite . . .

(8-11)

73番では, *Love* はまだ子供で母親の教育を必要とすると述べられる。“*Love* still a boy, and of a wanton is, / School'd onely by his mother's tender eye” (1-2) .

76番でも *Love* と eyes は接近する。

The onely light of joy, the onely warmth of Love.

She comes with light and warmth, which like Aurora prove

Of gentle force, so that mine eyes dare gladly play

With such a rosie morne . . .

(4-7)

81番でもイタリックの *Love* と eyes は接近する。

O kisse, which soules, even soules together ties

By linkes of Love, and only Nature's art :

How faine would I paint thee to all men's eyes,

Or of thy gifts at least shade out some part.

(5-8)

この *Love* は Cupid の擬人化としての性格は無いかもしれないが, ここで“ties” (5) が“eyes” (7) と韻を踏む様子を観察して次の (次に eyes が現われる詩である) 85番を見てみよう。

But give apt servants their due place, let eyes

See Beautie's totall summe summ'd in her face :

Let eares heare speech, which wit to wonder ties,

Let breath sucke up those sweetes, let armes embrace

The globe of weale, lips Love's indentures make :

Thou but of all the kingly Tribute take.

(9-14)

次の86番でも eye は lie と押韻し, 周辺に翼を持つ *Love* が現われる。

Let wo gripe on my heart, shame loade mine eye.

But if all faith, like spotlesse Ermine ly

Safe in my soule, which only doth to thee

(As his sole object of felicitie)

With wings of *Love* in aire of wonder flie . . .

(4-8)

さて、86番を境に全編の構成に不協和音が入り、ソネット形式が中断される。ここでの第5歌から第9歌を数える一連の songs の挿入は、以後に再出するソネット群に大きな意味を持つてくる。というのは、次に現われる87番以降のソネットには、Cupid が登場しないのである。それに代わって出てくるのは、太陽のイメージである。太陽のイメージの細部に関しては、分析が複雑になる嫌いがあるため、別の項目を立てることにする。

第5歌から第9歌までに Cupid が現われないわけではない。第5歌で、例えば Cupid の矢は Stella の指に例えられる。

I said, thine eyes were starres, thy breasts the milk'n way,

Thy fingers Cupid's shafts, thy voyce the Angels' lay . . .

(10-11)

あるいは、第8歌で、以下のようにある。

'Stella, in whose shining eyes,

Are the lights of Cupid's skies,

Whose beames, where they once are darted,

Love therewith is streight imparted.

(33-36)

このように従来のイメージのつながりと大きくずれてはいない。分析をとばしてしまっただが、63番と64番のソネットの間に出てくる第1歌にも Cupid は出てくるし、72番と73番の間の第2歌でも事情は変わらない。第2歌の第2連は次のように歌う。

(脚注不引)

Since sweet sleep her eyes hath charmed,

The two only darts of *Love* :

Now will I with that boy prove

Some play, while he is disarmed.

(5-8)

ここに見事に表象される「目」、Cupid の矢、子供、武器といったイメージ群は今までの分析を裏付けるようにここに結集している。ただ第8歌を境に Cupid という語は出てこないし、Love にまつわる擬人化も影を潜める。それはイタリックの *Love* が以降出てこないという事実で現実化する。

それではこの奇妙な題材の転換にわれわれは何を見るのだろうか。一つには、創作時期の違いである。Oxford 版の第5歌の注には、この詩が他の *Astrophil and Stella* の詩群よりも以前に書

かれた可能性について示唆してある⁶⁾もしそれが事実ならば他の songs も以前に書かれた可能性が高く、これらの songs 群は完成したソネット集の中間に挿入されたと考えるべきか、或は、完結した第一部に付して、別立ての詩編を付けていったと見るべきであろうか、判断は必要になる。Oxford 版の編集者 Ringler は、Astrophil の Stella への愛の題材は、当初11編の songs の形式で書き始められたと説く。これら trochee 形式の詩が完成する前に、心が変わって iambus のソネット形式に変更し、まとめて一部としたというのだ⁷⁾。そうだとすれば、songs 中断の場所を第9歌と考えてもいいようで、題材の違いと詩の配置の仕方から第10歌と第11歌をそれ以前の songs とは別と考える方が筋が通るようである。ただそう推測したとしても、第87番以降の題材の変化は説明したことにならず、この場所でソネット集 *Astrophil and Stella* の執筆自体が頓挫した証明を試みなければならない。それは執筆年代的にたどることが不可能である以上、題材の違いという現象が作品に表面化しているという事実のみしか指摘できない。

このあたりの事情に関して、Roche の、主にイギリスの Sonnet Sequences に関する興味深い著書によると、⁷⁾ その多分に数霊術的(numerological)な分析において、彼は全編のソネットの数108を非常に象徴的な数字と認め、(これは Shakespeare その他のソネット詩人の分析にも彼が共通して使っている方法であるが、)さらに87番の詩を全編の中心をなすと考えている。その数占いの方式がどの程度有効な読みなのか、或いはホメロスの『オデッセイ』を *Astrophil and Stella* の中に読み込むのが正しいのかについては、他の評家の判断を待つべきだが、87番を全編の中心をなすとする彼の考えは支持されるべきものであろう。あるいは、中心というよりも、分岐点と考えた方が妥当と思われるが、その直前に挿入されている9編の歌も、その9という数ゆえに象徴的な意味を持っているところまでは認めていいのかもしれない。

以上指摘したことは、Cupid と eyes が *Astrophil* の中でいかに密接に結びついているかということで、改めて確認することでもなかったのかもしれない。指摘する事実としては、*Astrophil* の中で、Stella と Love あるいは Cupid がしばしば接近していて、弓矢などの Cupid の付属物はひっくりめて恋愛に関する比喩として使われること、併せて eyes-lies の韻といったシェイクスピアに見られたパターンは Sidney にも観察されること等である。韻などは直接シェイクスピアに受け継がれ、基本的に恋愛詩ではないシェイクスピアのソネットからは Cupid は排除されることになった。ただ、Sidney においてはこのように密接だった Cupid と eyes の関係が、なぜ Shakespeare のソネットにおいて破綻したのか、Shakespeare はなぜソネットの中で Cupid を歌わなかったか、ということ、Petrarch からの流れで考えると、不思議な謎のように思われる。

(以下続稿)

注

- 1) Erwin Panofsky, *Studies in Iconology* (New York: Harper and Row, 1939), p.95. 筆者はこの本の存在を Cambridge 版の『夏の夜の夢』の注で知ようになった。R. A. Foakes, ed., *A Midsummer Night's Dream* (Cambridge: Cambridge University Press, 1984), p.56. Barbara Freedman はその著 *Staging the Gaze* (Ithaca: Cornell University Press, 1991), p.8で、Panofsky の他の著作に言及し、"a blinded eye"という比喩を通して Renaissance 当時の視点のあり方を示した。
- 2) Sidney からの引用として利用するのは、Oxford 版である。William A. Ringler, Jr., ed., *The Poems of Sir Philip Sidney* (Oxford: Clarendon Press, 1962). なお、イタリックに関しては、原文のまま引用したが、下線については、筆者が強調したい部分を示したものである。
- 3) シェイクスピアにおける eyes と lies との押韻の問題については、拙稿「シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(1)」(北見工業大学研究報告 第19巻第2号 1988, pp.243-57) 参照。

- 4) 「シェイクスピアの〈目〉のイメージに関する研究(3)」(北見工業大学研究報告 第20巻第2号 1989, pp.165-171) 参照。
 5) Ringler, p.484.
 6) Ringler, p.xlvi.
 7) Thomas P. Roche, Jr., *Petrarch and the English Sonnet Sequences* (New York: AMS Press, 1989), pp.236 ff. 及び p.553の Appendix H 参照のこと。

番号	目	英語	日本語
64	eye 3	Love 3	愛 3
65	eyes 8, 9	Love 1, boy 3, ball 7, arrow 11	愛 1, 少年 3, 球 7, 矢 11
66	eyes 11, 13		
67	eye 2, eye/speck 5	Love 1	愛 1
68	eyes 2		
69	eyes 7	shot 1, Love 2, Love 3	射 1, 愛 2, 愛 3
70	eyes 8	Cupid's dart 3	キューピッドの矢 3
71	eyes 11	Love 12, Cupid's dart 2, arrow 10	愛 12, キューピッドの矢 2, 矢 10
72	eyes 2	Love 13	愛 13
73	eyes 11, 13	Love 1, boyish 1	愛 1, 少年気 1
74	eyes 11, 13	CUPID 1	キューピッド 1
75	eyes 12	Love 1, Cupid 2	愛 1, キューピッド 2
76		Love 4, Love 11	愛 4, 愛 11
77		Love 4, 13, Love's 8	愛 4, 13, 愛の 8
78		Cupid 1, 8, shot 3, boy 3, bow 8, power 10, arrows 11	キューピッド 1, 8, 射 3, 少年 3, 弓 8, 力 10, 矢 11
79		Cupid's bow 1, Love 14	キューピッドの弓 1, 愛 14
80		boy 3, shot 8, dart 13	少年 3, 射 8, 矢 13
81	eyes 9	Love 2	愛 2
82	eyes 4, eyes 13	Love 7	愛 7
83	eyes 2	Love 4	愛 4
84	eyes 2	Love 7, 14	愛 7, 14
85	eyes 5	Love 2, shot 10	愛 2, 射 10
86	eyes 2	archer 4, arrows 4, Love 5, 8, 10, 13	射手 4, 矢 4, 愛 5, 8, 10, 13
87	eyes 11	blind 8	盲目 8
88	eyes 1, eye 12		
89	eyes 7	Cupid 8	キューピッド 8
90	eyes 1	Love 2	愛 2
91	eyes 10		
92	eyes 8	Love's 7	愛の 7
93	eyes 8	darts 8	矢 8
94	eyes 5	shoot 12	射 12
95	eyes 5	Love's 11, dart 11	愛の 11, 矢 11
96	eyes 10	Cupid's 2, Love's 10	キューピッドの 2, 愛の 10
97	eyes 10	Blindfolding boy 2, Love 6	盲目にする少年 2, 愛 6
98	eyes 7, eye 13		
99	eyes 1, eyes 7	Love's 3, darts 10, shot 13	愛の 3, 矢 10, 射 13
100	eyes 15, 11, 13, 14	Love's 4	愛の 4
101	eyes 5	Love's 6	愛の 6
102	eyes 2	Love 1, 3, 12, Love's 10	愛 1, 3, 12, 愛の 10
103	eyes 2	Cupid 2	キューピッド 2

Astrophil and Stella における〈目〉とキューピッドの関連表

以下の表にあるのは、*Astrophil and Stella* に現れるすべての〈目〉という語と、〈目〉を示すイメージラリー、及びすべてのキューピッドという語とそれを示すイメージラリーである。なお、Love に関しては、動詞は省略し、名詞であっても小文字で始まり、明らかにキューピッドと関連の薄いと思われるものは省いてある。

番号	〈目〉	キューピッド
2		shot 1, <i>Love</i> 2, 6, <i>Love's</i> 7
5	eyes 1	<i>Cupid's</i> dart 5
7	eyes 1	<i>Love</i> 12
8	eyes 9	<i>LOVE</i> 1, dart 3, boy 10
9	windows 9	<i>Cupid's</i> 13
11	eyes 10	<i>Love</i> 1, boyish 1
12	eyes 1	<i>CUPID</i> 1
13		<i>Love</i> 1, <i>Cupid</i> 9
14		<i>Love</i> 4, <i>Love</i> 14
16	eyes 10	<i>Love</i> 4, 13, <i>Love's</i> 8
17	eyes 11	<i>Cupid</i> 1, 8, shot 3, boy 5, bow 8, bowes 10, arrows 11
19		<i>Cupid's</i> bow 1, <i>Love</i> 14
20	eye 7	boy 2, shot 8, dart 13
21		<i>Love</i> 2
23	eyes 2, 14	
24		<i>Love</i> 7
25	eyes 3, 11	<i>Love</i> 4
26	starres 14	
28		<i>Love</i> 7, 14
29	eyes 9	<i>Love</i> 5, shot 10
31	eyes 5	archer 4, arrows 4, <i>Love</i> 5, 6, 10, 13
32	eyes 8	blind 8
33	eyes 13	
35		<i>Cupid</i> 8
36	eyes 3	<i>Love</i> 5
37	eye 6	
38	eyes 2	<i>Love's</i> 7
39		darts 6
41	eyes 3	shoot 12
42	eyes 1, 5, 11	<i>Love</i> 3, 14, dart 11
43	eyes 1, 6	<i>Cupid's</i> 2, <i>Love's</i> 7, 10
46		Blind-hitting boy 2, <i>Love</i> 6, 7
47	eye 13	
48	starres 1, eyes 7	<i>Love</i> 3, darts 10, shot 13
49	eye 8	<i>Love</i> 1, 3
50	eyes 7	<i>Love's</i> 6
52	eyes 3	<i>Love</i> 1, 3, 12, <i>Love's</i> 10
53	eyes 10	<i>Cupid</i> 5

54		<i>Love's 6, Cupid's dart 10</i>	
59		<i>Love 13</i>	
60		<i>Love 11</i>	
61	eyes 3	<i>Cupid 12</i>	
62	eyes 3	<i>Love 2, 3, 13, Love 6, blind 6, Love's 9</i>	
63	eyes 2, 5	<i>Love 7</i>	
64	eye 5	<i>Love 8</i>	
65	eyes 8, 9	<i>LOVE 1, boy 5, blind 7, arrow 14</i>	
66	eyes 11, 13		
67	eye 2, eye's-speech 5		
69	eyes 3		
70	eyes 7	<i>Love's 7, the Boy 7</i>	
71	eyes 8	<i>Love 3</i>	
72	eyes 11	<i>Love 2, Cupid's dart 8</i>	
73	eye 2	<i>LOVE 1, boy 1, Love 8</i>	
75		<i>Love 14</i>	
76	shining twins 1	<i>Love 4</i>	
	eyes 6, 11		
78	eyes 12		
79		<i>Cupid's 5, Love 13</i>	
80		<i>Cupid's 3</i>	
81	eyes 7	<i>Love 6</i>	
82		boy 4	
83		<i>Love 6, Love's 8</i>	
85	eyes 9	<i>Love's 13</i>	
86	eye 4, eyes 13	<i>Love 8</i>	
87	eyes 3, 6		
88	eyes 12		
89	eyes 3		
90	eyes 3		
91	eyes 9		
94	eyes 3		
98	eyes 13		
99	eye 1, eyes 12		
101	eyes 7	<i>Love 9, page 9</i>	
102	eyes 1		
104	stars 10		
105	eyes 9		
106	eyes 6		
1st	eyes 5	<i>Cupid 12</i>	
2nd	eyes 5	darts of <i>Love 6, boy 7, Love 16, 20</i>	
3rd	eyes 10, 18	<i>Love 7, 11, 12, 16, boy 7, Love's 8, Love 13</i>	
5th	eyes 10	<i>Cupid's shaft 11, Love 64</i>	
6th	eye 40	<i>Love 31</i>	
7th	eyes 7, 16		
8th	eyes 15, 33, 81, 84	<i>Love 26, 27, 36, 61, 62, Cupid's 34, darted 35</i>	
9th	eyes 5		
10th	eyes 2, 40	darts 36	
11th	eyes 42		

Astrophil and Stella における「目」のユーピッドの関連表

本論の一部は、1993年10月16日開催の第32回シェイクスピア学会におけるセミナー発表「エリザベス朝詩人としてのシェイクスピア『ソネット集』を中心に」の席上、筆者分担部分として発表した。なお、同セミナー司会の東大の成田篤彦先生には貴重な御助言を頂いたことを感謝申し上げます。

番号	目	目	目	目
1		Love's 7, the boy's 1, boy's	eyes 7	64
2	1 eye	Love 3	eyes 8, 9	65
3	1 eye	Love 3, Cupid's dart 8	eyes 11, 13	66
4	7 eyes	LOVE 1, boy 1, Love 8	eye 3, eye's speech 3	67
5	5 windows	Love 14	eyes 3	69
6	11 eyes	Love 4	eyes 7	70
7	1 eye	Love 4	eyes 8	71
8	1 eye	Cupid's 5, Love 12	eyes 11	73
9	11 eyes	Cupid's 3, 8, 9, 10, 11, 12, 13	eyes 11	75
10	7 eyes	Love 8, Love 8, Love 8, boy 4	eye 3	73
11	2 eyes	Love 8, Love 8, Love 13	eyes 3	75
12	11 eyes	Love 8	eyes 3, 8	76
13	11 eyes	Love 8	eyes 4, eyes 13	78
14	11 eyes	Love 8	eyes 3, 8	77
15	11 eyes	Love 8	eyes 12	78
16	11 eyes	Love 8	eyes 12	79
17	11 eyes	Love 8	eyes 12	80
18	11 eyes	Love 8	eyes 12	81
19	11 eyes	Love 8	eyes 12	82
20	11 eyes	Love 8	eyes 12	83
21	11 eyes	Love 8	eyes 12	84
22	11 eyes	Love 8	eyes 12	85
23	11 eyes	Love 8	eyes 12	86
24	11 eyes	Love 8	eyes 12	87
25	11 eyes	Love 8	eyes 12	88
26	11 eyes	Love 8	eyes 12	89
27	11 eyes	Love 8	eyes 12	90
28	11 eyes	Love 8	eyes 12	91
29	11 eyes	Love 8	eyes 12	92
30	11 eyes	Love 8	eyes 12	93
31	11 eyes	Love 8	eyes 12	94
32	11 eyes	Love 8	eyes 12	95
33	11 eyes	Love 8	eyes 12	96
34	11 eyes	Love 8	eyes 12	97
35	11 eyes	Love 8	eyes 12	98
36	11 eyes	Love 8	eyes 12	99
37	11 eyes	Love 8	eyes 12	100
38	11 eyes	Love 8	eyes 12	101
39	11 eyes	Love 8	eyes 12	102
40	11 eyes	Love 8	eyes 12	103
41	11 eyes	Love 8	eyes 12	104
42	11 eyes	Love 8	eyes 12	105
43	11 eyes	Love 8	eyes 12	106
44	11 eyes	Love 8	eyes 12	107
45	11 eyes	Love 8	eyes 12	108
46	11 eyes	Love 8	eyes 12	109
47	11 eyes	Love 8	eyes 12	110
48	11 eyes	Love 8	eyes 12	111
49	11 eyes	Love 8	eyes 12	112
50	11 eyes	Love 8	eyes 12	113
51	11 eyes	Love 8	eyes 12	114
52	11 eyes	Love 8	eyes 12	115